

略年譜

1899	明治 32	誕生	6月14日、大阪市北区天満で、開業医川端栄吉とゲンの長男として誕生
1901	明治 34	2歳	1月、父結核で死去
1902	明治 35	3歳	1月、母も同病で死去。大阪府三島郡豊川村大字宿久庄（現・茨木市宿久庄）の祖父のもとに引き取られる
1906	明治 39	7歳	豊川尋常高等小学校（現・茨木市立豊川小学校）に入学 9月、祖母死去。祖父との二人暮らしとなる
1912	明治 45	13歳	大阪府立茨木中学校（現・府立茨木高校）に入学
1914	大正 3	15歳	5月、祖父死去。孤児となり、大阪府西成郡豊里村（現・大阪市東淀川区）の伯父に引き取られる
1915	大正 4	16歳	3月、茨木中学校の寄宿生となる。この頃文学に熱中
1917	大正 6	18歳	3月、茨木中学校を卒業。9月、第一高等学校に入学
1918	大正 7	19歳	秋、伊豆に旅して旅芸人一行と道連れになる
1920	大正 9	21歳	7月、一高卒業。9月、東京帝国文学部に入学生
1921	大正 10	22歳	東大生の同人誌『新思潮』刊行。「招魂祭一景」を発表
1924	大正 13	25歳	3月、東大卒業。東京で作家への道を歩みはじめる 10月、同人誌『文芸時代』創刊。短編小説を数多く発表、新感覚派として注目される
1925	大正 14	26歳	「十六歳の日記」「孤児の感情」を発表
1926	大正 15	27歳	「伊豆の踊子」を発表。初の作品集『感情裝飾』を出版 秀子夫人との結婚生活が始まる
1929	昭和 4	30歳	上野に転居、浅草によく通う。「浅草紅団」連載開始
1933	昭和 8	34歳	「禽獣」「末期の目」を発表
1935	昭和 10	36歳	「雪国」連載開始。鎌倉に転居
1942	昭和 17	43歳	養女の件で高槻を訪れる。「名人」を発表
1943	昭和 18	44歳	秀子夫人とともに高槻を訪れ、従兄の娘を養女に迎える 「故園」「夕日」「父の名」を発表
1947	昭和 22	48歳	「哀愁」を発表
1948	昭和 23	49歳	日本ペンクラブの第4代会長に就任（～1965年） 『川端康成全集』（全16巻）の刊行が始まる 「反橋」を発表
1949	昭和 24	50歳	「しぐれ」「住吉」「骨拾い」を発表 「千羽鶴」「山の音」連載開始
1957	昭和 32	58歳	9月、国際ペン大会を東京と京都で開催
1960	昭和 35	61歳	「眠れる美女」連載開始
1961	昭和 36	62歳	「古都」執筆中、京都で暮らす。11月、文化勲章受章
1963	昭和 38	64歳	「私のふるさと」を発表
1965	昭和 40	66歳	10月、茨木高校創立70周年記念式典で講演
1968	昭和 43	69歳	12月10日、日本人として初のノーベル文学賞受賞 12月16日、茨木市議会で茨木市名誉市民に推挙
1969	昭和 44	70歳	10月26日、茨木高校での文学碑除幕式に出席 茨木市役所で茨木市名誉市民章受章および記念講演
1972	昭和 47		4月16日、自ら72歳10か月の生涯を終える

1968年(昭和43年)日本で初めてノーベル文学賞を受賞した川端康成の「ゆかりのふるさと」である茨木市は、その業績を讃え、「茨木市名誉市民」の称号を贈るとともに、多くの市民に川端文学に親しんでもらう拠点として、1985年5月、川端康成文学館を開館しました。

館内では、川端康成の著書、書簡、原稿や墨書のほか、模型・写真・拓本・映像など、ゆかりの品 約400点を展示しています。

ご案内

開館時間 9:00～17:00

休館日 火曜日、祝日の翌日（日曜日を除く）
年末年始（12月28日～1月4日）
展示替え、資料整理のための臨時休館あり

入館料 無料

交通案内

JR給持寺駅より 約1.0km
JR茨木駅より 約1.4km
阪急茨木市駅より 約1.3km
名神茨木ICから車で 約7分

駐車場あり
最初30分無料、以後30分毎100円
バスで来館の場合は、要事前連絡



茨木市立川端康成文学館

〒567-0881 茨木市上中条二丁目11番25号
TEL. 072-625-5978 FAX. 072-622-9858

「川端康成文学館/茨木市ホームページ」で検索してください



このパンフレットは10,000部作成し、1部当たりの単価は21.97円です。
令和7年3月改訂

茨木市立川端康成文学館

Ibaraki Municipal Kawabata Literature Hall



茨木高校での文学碑除幕式にて

川端康成のプロフィール

川端康成は「伊豆の踊子」「雪国」「山の音」「古都」などの作品で親しまれている作家で、1968年(昭和43年)日本人として初めてノーベル文学賞を受賞しました。

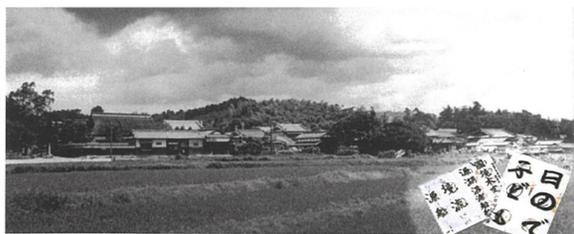
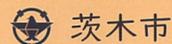
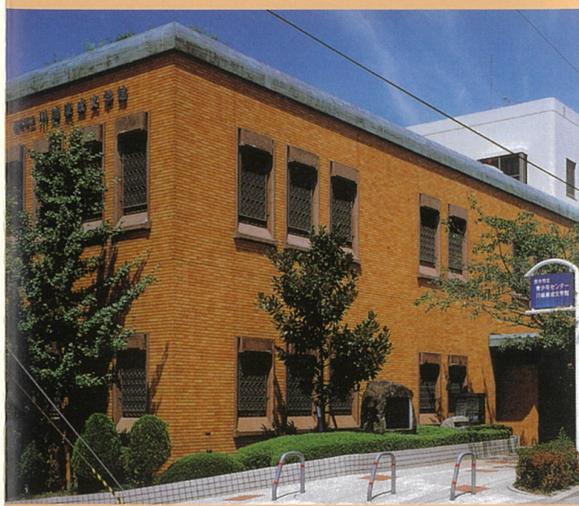
その作品は、授賞理由に挙げられた「日本人の心の精髓をすぐれた感受性で表現する、その物語の巧みさ」によって、世界的に高く評価されました。

1899年(明治32年)大阪府に生まれた康成は、両親と死別して、3歳からは大阪府茨木市の祖父のもとで育てられましたが、その祖父とも相次いで死別し、15歳で肉親をすべて失いました。

その境遇の寂しさを文学に没頭することで慰め、美しいものへの憧れで癒されたようですが、肉親との縁の薄い生き立ちは、その生涯と作品に深い影を落としています。

康成は、旧制茨木中学校を卒業後、文学への志を胸に秘めて上京し、作家への道を歩みます。

作家としての名声を確立してからは、次々と名作を生み出すかわら、評論活動も旺盛に行い、多くの新人を育てました。さらには日本ペンクラブの会長として、また国際ペンクラブの副会長として東西文化の交流に貢献し、日本近代文学館の設立に尽力するなど多方面に大きな足跡を残しました。



小学校時代の習字

1. 生い立ち一宿久庄での暮らし

両親と死別して2歳7か月で孤児となった康成は、茨木市宿久庄の祖父のもとで育てられることになる。ひ弱で食も細かったため、祖父に過保護なほど大切に育てられた康成は、内気で、外で遊ぶよりは本を読むことが好きな子どもであった。

小学校1年生の9月に母代わりの祖母が亡くなり、目の不自由な祖父と二人きりとなった生活は、一段とひっそりとし、寂しさを読書でまぎらわす日々であった。

3. 作品とその舞台（戦前）

東京帝国大学在学中に「招魂祭一景」で文壇に登場し、卒業後は新感覚派の新進作家として注目を集める。掌編小説ともいわれる短編作品を多数発表、「伊豆の踊子」で一躍有名になり、「浅草紅団」「雪国」と発表のたびに作家としての地歩を固めた。



「雪国」
1935年(昭和10年)1月、雑誌『文藝春秋』に始まった「雪国」は、『改造』『日本評論』『中央公論』など、さまざまな雑誌に掲載された。単行本としては1937年に初版、1948年に決定版を刊行。その後も加筆訂正されており、長い時間をかけて書かれた作品である。

「雪国」の舞台 清水トンネル(群馬県-新潟県)

5. ノーベル文学賞受賞



1968年(昭和43年)12月10日、スウェーデンのストックホルムでのノーベル賞授賞式。受賞記念講演は「美しい日本の私」と題して、エドワード・サイデンステッカーの同時通訳で行われた。

7. 作家の書齋

1946年(昭和21年)10月から1972年4月に亡くなるまで暮らした鎌倉・長谷の川端邸の書齋を再現。書齋の仕事机に向かい、康成愛用の原稿用紙(複製)に、万年筆で「伊豆の踊子」や「雪国」の冒頭文などを書く「作家体験」ができる。



「作家の書齋」コーナー



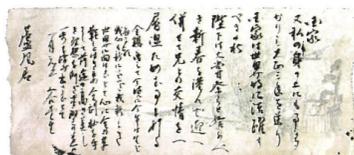
8. 企画展示

川端康成の誕生日(6月14日)にちなみ、毎年6月に生誕月記念企画展を開催。また、3～4か月ごとに、川端文学を様々な視点から紹介するテーマ展示を行っている。

2. 旧制茨木中学校の頃

旧制茨木中学校2年生の頃作家を志す。創作を始め、新聞社に投稿するなど将来への野心を温める。

中学3年生5月の、明日を知らぬ祖父の看取りの日々の記録は、後に「十六歳の日記」として発表された。



1915年(大正4年)1月元旦 康成中学3年生

祖父が亡くなった翌年、親友(蘆風)にあてた賀状。文学への志を年頭の決意として述べている。署名の谷室は亡父の号を用いたもの。

4. 作品とその舞台（戦後）

戦後は、「千羽鶴」「山の音」「古都」などで日本の自然や伝統美を描く一方、「眠れる美女」「片腕」では妖しい世界で読者を魅了している。



原稿「寒の櫻」(「山の音」連作の第六章「鳥の夢」として発表)

1950年代半ばから、海外での日本文学の紹介が始まると、川端作品も「雪国」をはじめとする作品が40以上の言語に翻訳、出版され、高い評価を受けた。

6. ふるさとの家

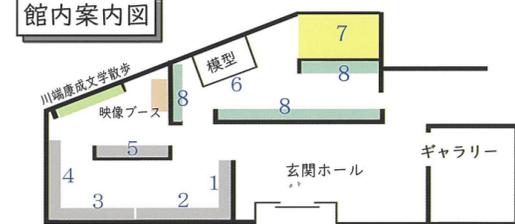
祖父と暮らした宿久庄の家には木斛の木があり、その木の上で読書をしたり、大きな庭石の上で昼寝をしたりしていたと、幼い頃をふり返って「故園」に書いている。

この家には祖父の死によって母方の伯父に引き取られるまで住んでいた。



祖父と暮らした屋敷の模型 (1/20)

館内案内図



川端康成文学散歩 川端康成ゆかりの地 茨木・大阪案内図

- 映像ブース
 - 川端康成とふるさと茨木
 - 川端康成と茨木のまち
 - 川端康成と豊川の里
 - ノーベル賞授賞式の様子
 - 旧制茨木中学校と「十六歳の日記」
 - 旧制第一高等学校と「伊豆の踊子」
- 「雪国」の舞台
- 「古都」の舞台
- 文学碑と名誉市民